

—惜しまれる唐崎堤の水生植物—

中 川 清太郎

「佐渡の植物を中心に自然の中へ、月に一度の島巡り」として2001年度も金井町は自然探訪教室を開催してきました。そのためにまとめた記事を掲載します。

植物は小鳥や獣に美味しい果実とともに種子の行方を任せるなど、考えきれない不思議さがある。長い年月をかけて進化したと言われるが、種子の散布のみならず、虫の形や行動に対応した花の色、形。進化には意識のようなものが働いているようで、実に巧妙で美しく、その香りも美味しさも神秘的ではないか。

ふだん見慣れている植物も美しい、日ごろ目にしない草木にはさらに新鮮さも加わって、はっとする。釣り人の獲物が掛かった時の手ごたえの様なものであろうか。ルーペを使えば花の仕組みや毛の形や生え方に至るまで、美しさと不思議さが倍増する。

目を閉じれば少し離れた小鳥のさえずり、流れる水の音や落ち葉のにおい、頬に受ける風も日の光も。

そんな静けさをふだんは無意識でいられるほど佐渡の自然は豊かで奥深く、植生には大変恵まれている。

この数ヶ月はこの自然の豊かさをテレビのニュースでよく感じる。アフガニスタンからの映像である。高海拔のためか乾いた岩や砂の裸地が大半のようである。日本の1.7倍ほどの国土に2680種の植物があるという。日本にはシダ植物と種子植物を合わせて5300種、変種などを含めると8120、佐渡は同じく1700位か。ちなみにイギリス1600、ニュージーランド1700、長崎県は1232、アフガニスタンと新潟県とはほぼ同様の数である。地図で見ても狭い佐渡が一国と肩を並べ、普通の当たり前で何気ない見慣れた風景の中に、これ程の植物的豊かさを秘めているのである。なお佐渡のコケ植物については、地元の本間健一郎先生が『佐渡博物館研究報告 第8集』（1981）で30ページにわたり、概要と佐渡産蘚苔目録を詳細に報告されているので参照して頂きたい。

ところがこの豊かな自然にも変化が起きているという。日本では1989年に『我が国における保護上重要な植物種の現状』を発行、レッドデータブックとも呼ばれ、絶滅の危機にある生物の種をまとめたもので、最初赤い表紙で出版されたのでこう呼ばれる。

なんと6種類に1種類が絶滅の危機に瀕しているという。その後改版されており、佐渡でこれに該当するものはトキ、サドマイマイ、メダカなど、植物ではフクジュソウ、

オオミスミソウ（ユキワリソウ）、オオアカバナなど花の美しいものや分布上貴重なものが、カキツバタ、ミクリや国仲で1961年頃より大発生した水田雑草オオアカウキクサなどの水生植物、昔よりその数の減少が目されるものがリストアップされており検討の対象になっている。この他世界に先がけて作られた『植物群落レッドデータブック』（1996）などもあり併用されている。

新潟県においても『レッドデータブックにいがた2001』が刊行され、絶滅したと考えられる種を筆頭に、激減や減少傾向にある多くの動植物がリストアップされている。

それによると「国や県、市町村でも、自然回復や景観改善を求めて住民の自発的な活動も増してきている。生きものの触れ合いをうたった工事によって、貴重な自然が破壊されたケースが少なからず見られ、山野に栽培植物が移植されたり、本来その地域には生息しない蝶が放され、他地域から遺伝的に異なるホタルやメダカが持ち込まれる事例もある。

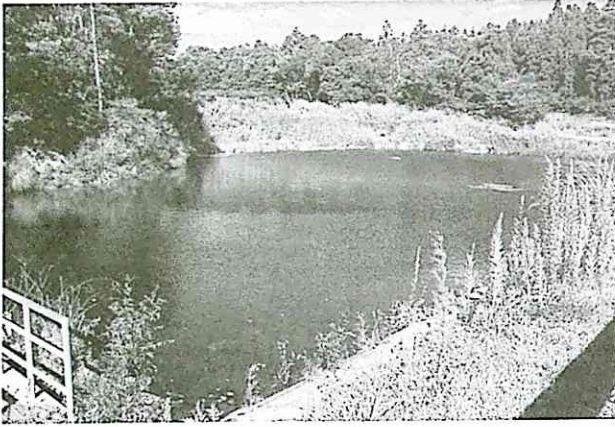
さらには河畔や草原が「見苦しい」という理由で撤去されて、園芸植物の花畑となり、人工飼育の品種の魚が自然の河川や池に放流されている事例などが、美談として報道されることがある。

善意の行為であっても、自然の山野や河川を個人の庭や都市公園と同一視した活動は、結果的に大きなダメージを与えるおそれがある。「大切な自然」の中身を再検討し、共通理解を深める必要がある。

これまでの保護対策は、減少、消滅したものを移入、移植で穴埋めすることに力点が置かれてきたが、これは結果的に在来種の生活をさらに圧迫しかねない。むしろ自生地の環境保全や盗掘を防止する有効な策を講ずることが急務である」と『レッドデータブックにいがた2001』刊行の背景を、保全や重要性、保護上の留意等を、また悪用を避ける為に産地をぼかして467ページにまとめてある。

ここに自然探訪教室の意義の一つを最近の金井町での事例を示し一考としたい。大和の唐崎堤で改修工事が行われた。奥にある小さな上の池と、手前の大きな堤（下の池）とが20m位離れていた。すぐ近くには「郡塚石」という史跡もあり、何時か自然探訪教室のコースにと思っていた。

下の池には水生植物のコウホネ（スイレン科）が大群落をなし、夏を待ちかねて黄色の花を次々に輝かせ、秋まで咲いていた。金北山の下の子ンサイ池は自然に埋まって名



大和の唐崎堤 (2006年)

前を残すのみとなってしまうが、そのジュンサイ (スイレン科) の佐渡唯一の大群落が、この池にコウホネと並び円い葉を浮かべていた。ヒシ (ヒシ科)、ヒルムシロ科が2種類、カキツバタ (アヤメ科)、ノハナショウブ (アヤメ科)、タヌキモ (タヌキモ科) の仲間、これらの水生植物を愛でる足元にも、佐渡に2~3箇所の希産種が数種生育していた。

2000年5月30日緊急事態に胸を痛めた畑野町の計良様からの電話で、浚渫工事の最中、乾かしている堤の底土に辛うじて生き残っていたコウホネを、軽トラック1杯避難させた。

同じくこの場所で、池と池の間にカラコギカエデ (カエデ科) が1本だけあった。和名は幹の鹿の子模様からで、カエデ科唯一、ヤナギの様に耐湿地性の特異な生態のカエデである。1998年7月26日の胸高幹周は170cm、直径60cm弱。本種の幹の寸法は記載が少なく、20cm以上、あるいは30cmの数値から、新潟県No1の大木であった可能性も高い。数少ないカエデの専門家、新潟市の尾崎富衛先生もNo1に異論は無かったが、跡形もなく無くなってからのことである。

今回記載しなかった種も含め、これだけ多くの水生植物が生育していた池は佐渡では見たことが無い。周辺景観も良く、ギンヤンマ、キイトンボ、アオイトンボなども、水面 (みなも) を揺らし、コウホネやジュンサイなどに止まっていた。トンボの種類は、古い池ほど豊富であるという。改修工事前は岸辺の環境も大変良く、周辺の植物相にも恵まれていたことから、豊かな水生昆虫相であったことがうかがえる。モノアラガイやサドマイマイカブリ (※昆虫・サドマイマイカブリ) も見かけ、小学校などでの水辺のビオトープ作りのモデルにも、代表的で有望かとも思っていたが、改修工事後の状態はコンクリートの部分も多く、大人にも危険な池となってしまっている。

この堤の貴重さが解りかけ何度か通っていた矢先の出来事であり、残念の一言であるが、昨年秋、ヨシノボリの仲間の稚魚が多数見られ、コウホネが少し生えていたので、

他の植物などの自然再生を望みつつその推移を観察したい。

唐崎堤は農業用水の堤であり、地元の人は「生えていたことは知っていたがそんな生物や貴重な植物とは何も知らなかった」という。無理も無いことではあるが何の意識もされないままにすっかり改変されてしまったその有り様に、工事前の環境アセスメントの重要性を思い知らされた出来事であった。さらにこの様な小規模の工事には環境アセスメントの義務なども無く、まだ隅々にまでレッドデータブックが生かしきれていないのが現状である。なお、環境アセスメント = (環境影響評価) とは、土地の形状変更、工作物の新設その他事業の実施にあたり、あらかじめその事業による環境への影響について自ら適正に調査、予測または評価を行い、その結果に基づいて環境保全措置を検討し、その事業計画を環境保全上より望ましいものとしていく仕組みをいう。

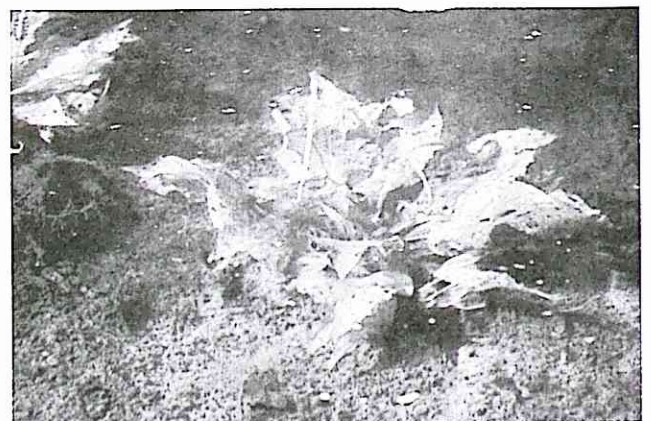
この唐崎堤の事例の様に、あとで悔やみ切れない事態とならない様にとの思いで、自然探訪会では各地を訪れ、今残っている自然の営みを十分堪能し、厳しさにも触れることで、郷土の良さを実感し、リフレッシュしつつ楽しめる一日となるようコース配分に心がけている。

「よかった」と喜んで下さる参加者ひとり一人の笑顔に励まされ舞い上がりっぱなしのまま。立派な先生方揃いの金井町で私ごときがこの機会を得ているのも、伊藤邦男先生が自然探訪教室という素晴らしいレールを敷いて下さったからに他なりません。伊藤先生に初めてお会いしたのは昭和51 (1976) 年5月30日、その人柄に引かれてお世話になり続けた私を、先生の健康と引き換えに私を解き放して下さったことに感謝しつつ、次回の出席を皆で心待ちにしています。公民館スタッフの陰日向の努力や、参加者の皆様方にお礼申し上げる次第です。平成13年の最終回は滝めぐり、最後は滝のような雨でした。きっと金井町の明日は晴れ。

初出『董れわか町』— 新たな指標を求めて —
新潟県金井町生き活き熟報告書・Ⅷ

2002年3月25日発行 (一部校正)

中川清太郎 真野町合沢 昭和23年生まれ



ミズオオバコ (2006年)